

# むかしはいま 202107

「伊勢さん、これ遺作ですか？」  
試写を観た、私の作品をずっと観てくれて  
いる友人が、唐突に言った…。

新作『いまはむかし-父・ジャワ・幻のフィルム-』のプレス関係者試写と完成上映会が始まった。本格的な上映は秋からだ、この段階での感想はとても気になる。そして、励まされもする。

「子が親と正面向かって対峙し、そこから自分とも対峙して、越し方を見つめ直す作業をされたのではないかと…。『戦争中のことは思い出したくない』という現地の女性の言葉が刺さります。」

「広島出身の私にとって戦争は、経験したことはなくとも身近なものとしてありました。日本は原爆の被害については語っても、アジアを植民地化したことについては、あまり語らなかったのですね…。」

「“とんでもないことしちゃったんだね…”という言葉がとても響きました。」

「時代の流れに押し流されながら、映画創りにしがみつこうにして人生を全うした親父…。」  
父が語らなかった分まで、伊勢監督が父を思い考え慕う姿に考えさせられました。」

「ミルフィーユみたいで、  
外側の層は社会性を帯びていて、  
でも本質はとても私的なポエム。  
1000枚の層のパイのような味わいの映画。」

会場のアンケートあり、手紙あり、メールあり…色々な感想が手元に届きはじめています。感想を読ませてもらいながら、

「ああ、そうか、この映画はこんなことを言おうとしているんだ…」と改めてヘボコンテンツは気付くのです。

で、「なかなかいい映画じゃないか、これはぜひ多くの人に観てもらわなきゃ」と上映活動のスイッチが入る。

映画は時代を写す、とはよく言われる言葉です。『いまはむかし』がコロナ禍で生れ出たことには様々な理由があるけど、最も重要なのは、戦争の時代と今との共通項だと思います。

その「むかし」と「いま」との共通項は何なのか、ひとつひとつ考えて行く必要がある。「むかし」を見つめることが、そのまま「いま」を見つめることになるだから…。そのことをそれぞれが自分事として考えること。

「もう、いつ死んでもおかしくない、と時々思う。」という私のヒトリゴトで映画は始まる。

「コロナ禍」で私たちは「いつ死んでもおかしくない…」という思いと、「誰が死んでもおかしくない…」という思いを強いられて来たのではないかな？  
あの戦争の時代のように。

心をしめつけられるようなその状況の下を生き抜くことで、次の時代へつなぐこと。

「いまはむかし、むかしはいま…」  
というナレーションで、映画は幕を閉じる。

ぜひ観てほしい。

伊勢 真一